

世界の著名な特許にみる ————— 第31回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

藤岡市助 その5 国内産業創出の機運 技術と資本

特別編：日本の近代産業基盤形成

I. 官営事業払い下げと創業

高島炭鉱・三菱財閥、深川セメント製造所・浅野財閥、院内銀山／阿仁銅山・古河財閥、兵庫造船所・川崎重工業、開拓使麦酒醸造所・サッポロビール、長崎造船所・三菱重工業、富岡製糸場・三井財閥

II. 欧米の電気事業の状況：年表（1850-1900）

藤岡市助編：

- ・日本初の電灯事業化会社「東京電燈株式会社」創立
- ・〈経済界の重鎮〉事績・経営思想・信条について：矢嶋作郎、原六郎、大倉喜八郎、三野村利助、柏村信、蜂須賀茂韶、横山孫一郎、益田孝、喜谷市郎右衛門、渋沢栄一
- ・藤岡市助の盟友 三吉正吉
- ・東京電燈株式会社の創設
- ・初海外渡航：米国フィラデルフィア・万国電気博覧会
- ・ケルビン卿との出会い
- ・将来を決定づけるエジソンとの出会い



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

はじめに

前回は、明治14年（1881年）5月に工部大学校を卒業した藤岡市助が、そのまま母校で教授職に就き、先輩の志田林三郎とともに、まだ世界的にも概念化されていなかった電子工学の教育をスタートするまでをお伝えしました。

当時の日本では、電気はまだ殆どの人々にとって未知の存在です。今号では、そのような状況を打破し、日本で電気産業を興し、普及させるべく、活動の場を大学から広げ、やがて産業界へと転向していく藤岡市助を、時代背景を解説しながら追います。

当時の日本産業界の状況

国内産業創出の機運

明治政府は西洋技術を導入し、模範工場を設立しましたが、財政難により明治13年（1880年）前後に、政府の殖産興業政策の一環として官営事業の払い下げを進めます。

この払い下げを受けて、三井、三菱、古河、大倉、浅野、川崎といった政商が事業を育成していき、各財閥形成の基盤となっています。

前号に続き、藤岡市助が先導しようとしている、インフラ整備にも関わる電気事業といった、新技術による新産業を興すには、大規模な先行投資や経営体力が必要となってきます。そこで、今回、特別編を設けて、日本の産業資本形成の過程についても紹介していきたいと思います。

特別編 日本の近代産業基盤形成

I. 官営事業払い下げと創業

以下に、当時払い下げられた代表的な官営事業（の一部）と、それを基盤に創業・発展した企業を一覧表にまとめました。藤岡市助が産業界へ身を転じていきますが、この当

時、官営事業が民営化していく過程であり、日本の民間による近代産業基盤形成の端緒を見ることができます。

新産業育成と投資を理解する彼らが、のちに藤岡市助が新技術を先導する電気事業へも投資を行うことになります。

1. 高島炭鉱・三菱財閥

高島炭鉱（長崎県）は、元々佐賀藩が採掘していた炭鉱で、明治政府によって官営化された後、明治7年（1874年）に後藤象二郎が払い下げを受けました。

後藤は大蔵省から55万円で炭鉱を取得しましたが、資金不足のため、即納分20万円をジャーディン・マセソン商会から借り入れ、残りは分割払いとしました。この契約は極めて不利で、利益は商会側に流れ、後藤には重い負債が残る構造でした。最終的には負債総額130万円に達し、政治活動にも支障をきたします。

福澤諭吉は、高島炭鉱が外国資本に渡ることを危惧し、岩崎弥太郎に買収を働きかけました。岩崎弥太郎は三菱財閥の創業者で、後藤と同じ土佐藩出身であり、西南戦争では新政府軍の輸送を一手に引き受け、莫大な利益を得て地位を築いていました。しかし、なかなか買収に応じない弥太郎に、16歳下の弟、弥之助は高島炭鉱経営の利益見込みを予想した上で、弥太郎に買収を勧めたことで、最終的に明治14年（1881年）に三菱が97万1,600円で買収しました。

これにより、後藤は負債を清算することができ、三菱は弥之助の先見性により、三菱最大の事業として、いわばドル箱、産業資本に発展する核となりました。

2. 深川セメント製造所・浅野財閥

同じく明治政府が殖産興業政策の一環として設立した官営模範工場のひとつで、明治8年（1875年）、工部省のもとで操業を開始し、日本初のポルトランドセメントの国産化に成功しました。東京・深川清澄町（現在の江東